

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 基礎篇第九課 かまくらを あるきます： 移動の表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002788">https://doi.org/10.15084/00002788</a>

日本語教育映画解説9

基礎篇  
第九課

かまくらを あるきます

—移動の表現—

国立国語研究所

## 前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするものである。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。この第九課「かまくらを あるきます」の解説は、日本語教育センター日本語教育教材開発室日向茂男、同日本語教育研修室石井久雄の執筆によるものである。

昭和55年3月

国立国語研究所長

林 大

## 目 次

1.	はじめに	1
2.	この映画の目的・内容・構成	2
2.1.	目的・内容	2
2.2.	構成——場面を中心として	3
2.3.	語, 語法, 構文	23
2.4.	音声と表記との関係について	26
3.	この映画の効果的な利用のために	27
3.1.	動詞について	27
3.2.	格助詞について	41
4.	参照文献	45
資料 1.	使用語彙一覧	49
資料 2.	シナリオ全文	61

## 1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初步日本語学習期における視聴覚補助教材として企画・制作されたもので、この映画「かまくらを あるきます」は、その第九課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にあたったものは、次の通りである。

昭和51年度日本教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子 国際基督教大学専任助手

今田 滋子 国際基督教大学助教授

川瀬 生郎 東京外国語大学附属日本語学校教授

木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授

窪田 富男 東京外国語大学助教授

斎藤 修一 慶應義塾大学国際センター助教授

日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄 日本語教育センター長

武田 祈 " 日本語教育研修室長

日向 茂男 " 日本語教育研修室研究員

田中 望 " 日本語教育研修室研究員

水谷 修 " 日本語教育研究室長

この映画「かまくらを あるきます」は、日向茂男の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、この映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見

が加えられている。

本解説書の執筆には日本語教育センター日本語教育教材開発室の日向茂男、同日本語教育研修室の石井久雄があたったが、企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

## 2. この映画の目的・内容・構成

### 2.1. 目的・内容

この映画「かまくらを あるきます」は、日本語教育映画基礎篇の全般的方針に従い、利用の便宜を考慮してある。すなわち、この「かまくらを あるきます」に即して言うならば、意味が移動に関わる動詞を導入するときに、あるいはそのような導入の課程をおえた後に、補助教材として利用するものと予想して、この映画を企画してある。実際、このような映画教材を利用するとなれば、そうした利用のし方が一般的であろう。ただし、また、映画を教材の主体として学習させる場合にも、初步の或る学習段階に到達させ

ることができるように、配慮してはある。

主たる狙いは、サブタイトルに「移動の表現」とあることに覗い得るとおりである。移動の表現という言い表わし方は内容とするところが広いようにも思われるが、基本を成すものは中ん就く動詞であり、それに格助詞「を」「に」「へ」「から」「で」および副助詞「まで」を加えてある。動詞の導入は既に第五課「なにをしましたか」で行なっているので、ここでは、或る意味領域すなわち移動の動詞を中心に、それに関わる格助詞を加えて、学習することになる。

視聴覚教材を通して教える表現として適切なものにいろいろあろうと思われるが、動詞に関わる表現が一大領域を形成するであろうことは、おそらく論をまたない。物体を表わす名詞もまた一大領域を形成するものとは思われるが、その場合は、視聴覚教材に常について纏わるところの、映像における具象的な物体を言語としての抽象的な概念にいかに昇華し得るかという問題を、ほとんど典型的にかかえていると言ってよい。動詞は、その問題に関しては、名詞よりは危険でないところに位置しているように思われる。名詞と動詞との、この言わば抽象性－具象性の軸の上における位置関係は、蓋し言語にとって普遍的である。固有名詞が存在して固有動詞というものが存在しないということが、それを象徴している。

## 2.2. 構成——場面を中心として

2.2.1. 映画を場面に区切り、せりふを挙げ、それらについて注釈を加えていく。場面およびせりふまた注釈については、つぎのような記号を与える。

1. 映画の構成に従って場面を八つに分け、順にⅠ, Ⅱ, …, Ⅷとする。

場面ⅦとⅧとの間に位する1場面を時間の都合でカットしたが、注釈では、場面補として、参考のために補った。

2. せりふを文に切った上で、その一文一文を、初めから終わりまでの通し番号によって順に①, ②, …, ⑩とする。場面Ⅱにおいて文⑦と⑧との間に位する10文、および場面補における全5文を、時間の都合

でカットしたが、注釈では、文番号を与えることなく、参考のために補った。

3. せりふの文を参照して注釈で新たな文を与えるときに、その参照したせりふの文の番号に'印を加え、例えば、①'，②'とする。せりふの一文にいくつも新たな文を与えるときには、'印を重ね、例えば①'，①"，①'"とする。

文の通し番号は、資料の使用語彙一覧およびシナリオ全文についても共通する。文の認定の問題に立ち入ることはしない。

2.2.2. この映画は、「かまくらを あるきます」というタイトルが示すように、鎌倉を舞台とし、そこをめぐり歩く男女三人連れを描く。登場人物三人は、場面Ⅰで紹介されてしまうが、相互の関係は映画では最後まで友人らしいという以上に判らない。姓名も、知れるのは「佐藤」のみである。このような不明朗さは、意図したところにもとより反するものである。原脚本においては、

吉川は、若い男性。森田および佐藤の先輩にあたり、鎌倉に住んでいて、東京から遊びに来た森田・佐藤に鎌倉の案内をする。

森田は、どこにでもいそうな女子学生。

佐藤は、男性。約束の時間に遅れても悠悠としていたりしてコミカルな感じがあり、森田と恋人の関係にある。

というような人物像を考えていたが、予算等の制約のため、失敗したのである。恋人でありながら佐藤と森田とが一緒に現われないこと、佐藤がコミカルな感じを表現し得ていないことなど、問題が残っている。

三人は鎌倉を一日で歩き回ったことになるが、現実問題としてハード＝スケジュールかも知れない。また、画面では、始めと終わりとを朝と夕とに設定しているが、影が終始長いために一日の流れというものが感じられない。ロケーションの際に雑闊を避けて、もっぱら朝を選んだためである。

## I 鎌倉駅前、朝

鎌倉の名を高くしたのは、1185文治元年以降、源頼朝が居を構えて守護地頭を設置すなわち国家的軍事警察権を掌握したことである。源氏將軍は三代約30年で滅んだが、なお執権北条氏が110年余国政の実権を握り、都合一世纪半、鎌倉は日本の政治経済文化の中心を担った。鎌倉文化の重要な一領域は宗教であり、今日にまで伝えられてきた鎌倉というものも宗教に関わるところが大きい。

乗用車数十台を前景に描いて、遠景に国鉄横須賀線鎌倉駅が映し出される。この駅舎は、外見が木造、中央に伸び上がった時計塔がシンボルである。駅がアップで映し出されると、行きかう人びとの多いのに気づく。そのうちに、向かいあって立っている男吉川と女森田とがいて、表情までは画面に明瞭でないが、風情はいかにも人待ちのようである。

吉川「①遅いですねー。」

森田「②遅いですね。」

③あの人は、いつも遅れます。」

①は腕時計を見ながらのことば。待ちあわせて相手が遅れているときの動作としては、腕時計が普及しているところでは世界共通であるかも知れない。①②「遅い」は、格・主題を補うならば、

佐藤さんは到着が遅いですね。

ということにでもなろうものであり、時間を予定・予想以上に要しているという意味であって、なにに時間を要するのかは「\_\_\_が」で表わされる。③「遅れる」は、やはり格を補うならば、

到着が遅れます。

ということにでもなって、予定の時刻を過ぎているという意味である。これを修飾している「いつも」は、被修飾の動詞で表わされる事柄が普通のことになっている・習慣であることを意味し、言わば頻度・習慣化に関わる情態の副詞である。

③「あの人」は、吉川および森田が待ちあわせをした人、佐藤。文脈指示であり、指示対象となっている人物について或る程度以上の知識がなければ、使うことができない。「あいつ」「あの方」と対比するならば、待遇表現としてニュートラルである。ただし、一般に、人物を対象とした文脈指示においては、「あの\_\_\_\_」が指示対象の人格をおとしめることがしばしばであり、すなわち話し手にとって身内など近しい人を指示して用いられることが多い。③も、佐藤が森田の恋人であるということに支えられた、その用法である可能性がある。

駅の改札口、そこから人が間断もなく出てくるのが映し出されるが、画面の様子からは、吉川・森田の待ち人は現われない。カメラに動きのない画面も、心理描写としての意味をもっている。続く画面は、大時計が10時16分の刻みから17分の刻みへ移るところであるが、画面の動きが性急であるため、この前後の吉川・森田の心理描写に必ずしもうまく合致してはいない。これに続く吉川・森田の姿表情は、少なくも日本人から見るならば明きらかにいらだっている。途中にさしはさまれたバスの出入りは、二人のいらだちを浮き上がらせるのに成功しているか、直ちに肯定することはできない。

こうしていらだつ二人の心理描写を前提として、画面はアップで一人の男をとらえる。タバコをふかしながら悠悠と現われたこの男が、吉川・森田の待つ「あの人」佐藤である。

佐藤「④おはようございます。」

佐藤は、そう言いながら頭を前すなわち吉川の方へ倒していく、気持ちは上体全体を屈めているであろう。吉川は、この動作にこたえて同じ動作をし、しかもことばを返すことをしていない。この、佐藤・吉川両者における挨拶の動作そのものの日本性、および吉川に見られるように動作のみで挨拶として済ませ得ることの日本性に、注目しておくべきである。

画面はタクシー乗り場に転じ、声は吉川のものがはいる。

吉川「⑤さあ、急ぎましょう。

⑥あそこから、タクシーに乗りります。」

⑥は、「あそこ」が乗り場を指示していることは明瞭であるが、全体としての意味は必ずしも明瞭でない。

⑥' あそこからタクシー（の中）に乗り（こみ）ます。

⑥" あそこから（鎌倉大仏まで、）タクシーに乗り（て、行き）ます。  
の両様に解することが可能で、言い換えるならば、

(1) 「乗る」は、乗り物の外から内へ身を移すという、言わば瞬間的な行為を意味し、「\_\_\_\_\_から」は、その行為の開始場所として、乗り物の外または入り口を意味する。

(2) 「乗る」は、乗り物の中または上に身をおくことによって移動するという、言わば継続的な行為を意味し、「\_\_\_\_\_から」は、その移動の始まりの場所を示す。

ということである。⑥はどちらかと言えば⑥' (1) の方ではないかと思われ、実際にそうであるならば、「あそこ」が乗り場であっても、

⑥'" あそこでタクシーに乗りります。

と「\_\_\_\_\_で」を用いることもできる。もとより、「\_\_\_\_\_で」は、「\_\_\_\_\_から」とは異なっていて、瞬間的な行為を意味するものとしての「乗る」のその行為が行なわれる場所を示す。⑥'"の形は⑯に現われている。⑥" (2) の方では、「\_\_\_\_\_で」は区間を示さないならば現われ得ない。

⑤冒頭「さあ」と末尾「ましょう」とは、あい応ずるものである。すなわち、間投詞「さあ」は、短く「さ」でもよく、話し相手あるいは自分自身に行動を促すことばで、その行動も多く直ちに取りかかるべきものであり、ここでは相当して動詞「急ぐ」が現われている。動詞「急ぐ」は、物事をするのを、ここでは鎌倉めぐりを始めるのを、早くする、という意味。助動詞「ましょう」は、「う」が、話し相手に対しては勧誘を、自分自身に対しては意志を表わす。「さあ\_\_\_\_\_ましょう」の形は、⑯にも繰り返される。

三人がタクシーに乗りこむ。その順番は吉川・森田・佐藤で、吉川が最初に乗りこんだということは、降りるときには最後になるわけで、日本の慣行としては、タクシー料金を自分が払うという吉川の意志表示である。森田・佐藤の順序はおそらくレイディニファーストの原理によるもの、もしふたりのみで乗るのであれば、料金が払いの原理によって佐藤が先になりもする。

## II タクシー

画面は観光絵地図であり、その上を一本の人差し指がたどり、吉川の声がはいる。人差し指が吉川のものであることは、その声によって判るのである。また、吉川によるこの案内が、場面Ⅰから転じたものとして些か唐突ながら、実はタクシーの中で行なわれていることは、直ぐ後に続く画面をも知った上で判ることである。

吉川「⑦最初に、ここへ行きます。」

指示詞「ここ」は、鎌倉大仏の絵を通してその所在地を直接に指示する。格助詞「へ」は、動詞「行く」の目標となる場所を示す機能をもっている。

冒頭「最初に」は、順序を示して「最後に」と対をなし得、両者の間に  
(その) 次に (その) 後で 更に  
などがはいり得る。また、序数

第一に 第二に .....

一番目に 二番目に .....

を用いても、接続詞あるいはそれに準ずる

それから そして そして

などを用いても、順序を示すことができる。この課では、⑦⑨⑩に、「そして」が現われる。

原シナリオにおいては、⑦に続く吉川のことばとして次があった。画面は、吉川の人差し指の先を追い、観光絵地図の上を動いていたはずである。

ここから海岸まで歩きます。 (12)

この駅で電車に乘ります。 (16)

そして、鎌倉駅へ戻ります。 (17)

この道を歩きます。 (18)

そして、八幡宮の前に出ます。 (19)

ここへ行きます。

それから、この道を通ります。

ここから山に登ります。 (20)

こちらへ下ります。

そして、鎌倉駅へ帰ります。 (21)

すなわち、画面で展開される移動の表現を、あらかじめ地図上にたどって示そうとしたものである。予告であるだけに、括弧内の現シナリオの文番号のごとく、結局は後で繰り返されるものもある。

タクシーの外の風景として画面に街並みが走り、高徳院清淨泉寺総門が現われてくる。

吉川「⑧あの門の前で、タクシーを降ります。」

「タクシーを降りる」は、⑥' 「タクシーに乗る」と対をなす表現。したがって、⑧全体が⑥' 全体と表現上の対をなしている。格助詞「を」に対して「から」も可能であって、前者はタクシーと「降りる」との関わり合いに重点があり、後者はタクシーの外にいることになることに意識が向かっている。

タクシーが止まり、三人が降りる。画面に直接知ることはできないが、脈絡上、清淨泉寺総門である。

### III 高徳院清淨泉寺大仏

前の場面の最後、タクシーの窓外を流れる街並みには、奈良を思い出させる風情がある。鎌倉の大仏は、源頼朝が奈良東大寺の大仏にならおうとし、その遺志が継がれて1252建長4年に現存の形で成った。もとは大仏殿もあつ

たのであるが失われて、大仏は露坐のままになっている。鎌倉彫刻の典型、ただし制作者未詳、国宝。顔の長さ2.35m、坐高11.31m、台坐を含めた高さ13.35m。

大仏を正面に、それに向かって歩く三人の後ろ姿をとらえた画面。次いで大仏の左横顔から左上腕・台坐へと、カメラを振りおろした画面。鮮明さを欠くが、胎内潜りの入り口が見える。胎内に階段があって、背中の窓から外が眺められるようになっているのである。その入り口の前に三人がいる。

吉川「⑨ここから、中にはいります。」

森田「⑩佐藤さん、はいりませんか。」

佐藤「⑪いいえ、外にいます。」

⑨「ここ」は入り口の直接指示、「\_\_\_\_\_から」はやや一般化するならば出入り口を示している。実は、⑥に見られた「\_\_\_\_\_から乗る」の構文でも、「\_\_\_\_\_から」の可能性としていまひとつ、⑥' (1) に準じて乗降口を示すものがあり、ただ、実際の⑥において、「あそこから」の「あそこ」が乗降口では明きらかになかったのである。⑨の「\_\_\_\_\_から (\_\_\_\_に) はいる」の構文でも、「\_\_\_\_\_から」の示す場所に非一様性があって、例えば、

⑨' 外から中にはいる。

では、あり得べき入り口が経由点に転じてことになる。要するに、⑨の「はいる」と⑨' のそれとは、意味するところの行為の開始点に認め方の違いがあり、その違いがそのまま「\_\_\_\_\_から」の場所の違いとして現われてくるのである。

動詞「はいる」は、中へ向かって移る意味。したがって、⑨「中に」は自明でもあり、⑩では消えている。対語は⑨に現われる「出る」。

⑨「中に」の格助詞「に」は、移動の目標となっている場所を示す。格助詞「へ」に置き換えるてもよい。一方、⑪「外に」の格助詞「に」は、存在する場所を示し、他の格助詞に置き換えることができない。ここでも、格助詞の示す場所の違いは、関わっている動詞の意味のあり方に依存している。

⑩末尾「ませんか」は、実質的には勧誘である。しかしながら、形式上は否定疑問形であって、その分、勧誘の積極性が勧誘の直接の形式「ましょう」より劣り、したがって⑤に見られた間投詞「さあ」が、些か共起し難い。なお、「ましょう」「ましょうか」「ませんか」については、第十三課『おみまいに行きませんか』で特に取り上げて扱う。

吉川と森田とは、胎内にはいっていく。その次の画面は、外で待っている佐藤を上方から捉えていて、判り難いのであるがすなわち大仏の背中の窓から見た外景のひとこまなのである。やがて吉川と森田とは胎内から出、ふたたび三人そろって、大仏を後にする。

清淨泉寺総門。今度は境内側から。これに観光絵地図の大仏が一瞬重なり、画面は観光絵地図の上でそこから七里ガ浜方面へ道をたどる。そのとき、吉川の声がはいる。

吉川「⑫ここから、海岸まで歩きます。」

「ここ」は現在地の直接指示。始まりを示す格助詞「から」に対して、終わりを示すのは一般に副助詞と言われる「まで」である。

「歩く」は、普通に進み得る速さで脚を交互に前に出す動作、また、そうして進んでいく移動。ここでは後者。鎌倉大仏から稻村ガ崎近辺までの間に、極楽寺坂切通や針磨橋やがある。

#### IV 七里ガ浜

江の島の対岸を西端、稻村ガ崎を東端として、4km余すなわち鎌倉時代の七里、遠浅の七里ガ浜が続いている。袖ヶ浦とも言う。画面は、江の島を臨み、また稻村ガ崎を背景に入れもしている。江の島は、断崖荒磯に囲まれた小島ながら、江島神社を中心とする史跡名勝を数か所もっている。稻村ガ崎は、新田義貞の1333元弘3年の鎌倉攻めの伝説をもつ史跡である。

画面は、三人が道を歩いているところから始まる。次いで路地の向こうに

海を見せ、このとき佐藤の声がはいる。

佐藤「⑬海が見えますよ」

動詞「見える」は、目に視覚上のものとして感じられるという意味。見ることができるという可能の意味もあり、ここをそのように解することもできる。⑭にも「見える」があり、⑯に同類の表現「聞こえる」が現われる。

構文「\_\_\_が\_\_\_ます」は、話し相手が「\_\_\_が」の「\_\_\_」に関心を払っていないと判断した上で、その「\_\_\_」について叙述するもの。対比せらるべき構文として、「\_\_\_は\_\_\_ます」があり、その構文は、話し相手が「\_\_\_は」の「\_\_\_」に関心を払っていると判断した上で、その「\_\_\_」について叙述する。

Ⓐ 海が見えませんね。  
⑯' 海は見えますよ。  
のような対話が成立し得る。

画面は、海を映し出し、向かって右の方へ動いていく。江の島が捉えられ、森田と吉川との声がはいる。

森田「⑭向こうに島が見えますね。」

吉川「⑮あれは、江の島です。」

⑭冒頭「向こうに」は、見えるものの存在位置を示し、距離あるいは物を間において自分と反対の側にという意味。物を間に描いているときには、海の向こうになにがある。

のように、物が「\_\_\_の」の形で表わされる。⑭は、距離を間においていると言ってよいが、また、距離を間においたときにはその間に一般に物があるわけで、

⑯' 海の向こうに島が見えますね。  
ということもあり得る。⑮「あれ」は、「向こう」を「こそあ」の「あ」に置き換えることもできることを、示している。

⑭の構文「\_\_\_が\_\_\_ます」については⑬を参照。

⑯「\_\_\_\_は\_\_\_\_です」の構文は、中立的な叙述であると見られる。対比せられるべき構文として「\_\_\_\_が\_\_\_\_です」があり、その構文は、「\_\_\_\_です」の「\_\_\_\_」に話し相手が前まえから関心をもっていると話し手が判断したときに、可能となる。ここ⑯では、話し相手森田が江の島に関心をもっているか、話し相手吉川は判断を避けたことになる。もし森田に江の島への関心があったならば、

⑭'' 向こうに見える島が江の島ですね。

⑮' そうです。あれが江の島です。

というような展開になっていたであろう。⑭''⑮' と⑯⑯との並行性が注目されるであろう。⑭'' の「\_\_\_\_が\_\_\_\_ですね」の構文については、⑯を参照。

浜辺で遊び戯れる三人が、海面のきらめきや打ち寄せる波やの映像と交錯しながら、映し出される。

## V 江ノ島鎌倉観光電鉄

江ノ島鎌倉観光電鉄略称江ノ電の稻村ガ崎駅。吉川の声がはいる。

吉川「⑯この駅で、電車に乘ります。」

⑯⑯'' および⑯を参照。

改札口を通り、三人はホームへ向かう。観光絵地図により、駅の位置が、というより駅の絵が、示される。画面はふたたび三人に戻り、電車が到着したところで、三人が乗る。次いで、電車の最前端にいて見られるような風景、すなわち単線線路を中心にして、沿線の木ぎや家いえやが後方へ流れしていく。観光絵地図で、江ノ電に沿って鎌倉駅までがたどられる。吉川の声がはいる。

吉川「⑯そして、鎌倉駅へ戻ります。」

格助詞「へ」また接続詞「そして」については、ともに⑦を参照。

⑯は、動詞を「戻る」から「帰る」に入れ換えただけで、⑯に繰り返され

る。「戻る」と「帰る」との意味の違いは、⑦で経由を表わし、⑨で終着を表わすというところに典型的に見られる。また、いま、或る会社員がいて、社用で外出し、用が済んだ後は帰社するなり直接に帰宅するなり自由で、実際にどちらかをしたとする。さて、そこまでは知っている他の会社員が、最終結果まで知っている別の会社員に彼の所在を尋ね、その会社員が答える。

Ⓐ 戻っています。 Ⓛ 戻りました。

Ⓒ 帰っています。 Ⓛ 帰りました。

このうちで最もありそうなものはⒶおよびⒻであるが、ⒼまたⒸもあり得なくはない。そして、ⒶⒼは帰社、Ⓕは帰宅、Ⓒは両様である。要するに、「戻る」とは仕事などの必要があって元に向かい、「帰る」とはそうした要因を除いて元もとあるべきところへ向かうことである。人間は最後は土に「還る」のであって、「戻る」のではない。しかしながら、「帰る」と「戻る」との意味の違いは、実は大方消されてしまっているように思われる。

## VI 若宮大路

鶴岡八幡宮の参詣道として1182寿永元年に築かれた若宮大路は、社前と由比ガ浜との間を南北に2km近い直線で伸びている。社前では横須賀線が西側にあるが、鎌倉駅構内南端で交叉し、以南は横須賀線が東側に走る。幅員に差があり、由比ガ浜近辺で約9m、鎌倉駅近辺で約5m、社前で3m弱といったようで、大路を長く見せるための細工である。社前と鎌倉駅の北との間は、桜や躑躅やを並み木として植えこんだ低い土手が両側に築かれ、歩行するしかできなくなっている。

画面は、三人が鎌倉駅前で横断歩道を渡っているところから始まる。ついで、観光絵地図で、若宮大路。吉川の声がはいる。

吉川「Ⓐこの道を歩きます。」

動詞「歩く」についてはⒷを参照。ここでも移動の「歩く」であって、その移動が行なわれる場所の全体を格助詞「を」で示している。この映画のタ

イトル「鎌倉を歩きます」の構文も、⑩に同じい。

若宮大路を歩く三人が画面に現われる。その足もとのみを画面として捉えたところで、吉川の声。

吉川「⑩そして、八幡宮の前に出ます。」

接続詞「そして」については⑦を参照。動詞「出る」は、至り着くという意味である。ただし、⑨⑩に関連して触れたように、外へ向かって移ることが基本的な意味であり、それに従って強いて言うならば、現にいる場所ないしたどる経路が内であり、至り着く場所が外である。こうした移動で目標となる場所が、格助詞「に」によって示される。

観光絵地図で八幡宮の鳥居。次いで実物。鳥居の向こうに八幡宮社殿が見えている。鳥居は、神社の門であり、柱二本の上に笠木を渡し、柱二本を貫でつなぐ。画面の鳥居は鶴岡八幡宮のものとしては三ノ鳥居と呼ばれ、若宮大路に更に二ノ鳥居・一ノ鳥居がある。

森田「⑩あれが八幡宮ですね。」

吉川「⑩そうです。」

⑩あの鳥居の下を通ります。」

⑩の動詞「通る」は、或る場所の中心または前に対してその一方の側から反対の側へと移動する意味で、経由することになるその或る場所が、格助詞「を」で示される。ここでは、鳥居のこちら側から向こう側へと移動する。

⑩「\_\_\_が\_\_\_ですね」の構文は、「\_\_\_が\_\_\_ですか」などの構文とともに、「\_\_\_ですね」の「\_\_\_」に前まえから関心をもつていてその確認を行なおうとするもの。話し手森田が鶴岡八幡宮に当然関心を向けていたであろうことは、⑩の吉川の発言により、行き着くところが鶴岡八幡宮であることが予告されているのであるから、明きらかである。対比せらるべき構文として「\_\_\_は\_\_\_ですね」があるが、それは中立的な叙述である。これから連れていってもらうところに対して、礼儀として期待を表現すべきであると

するならば、

㉚ あれは八幡宮ですね。

はそぐわない。それでは、通りすがりの事物の確認になってしまふ。

三人は鳥居の下を通っていく。

## VII 鶴岡八幡宮

鶴岡八幡宮は、1063康平6年、前年に奥州の安倍貞任を討って前九年の役を終えた源頼義が、京都の石清水八幡宮を鎌倉に勧請したことに始まる。現在地に造営したのは源頼朝であり、鶴岡の名に旧地の名を引き継いだ。まつられた主座は応神天皇および神功皇后で武道の神であり、源氏北条氏はもとより足利氏豊臣氏徳川氏からも保護されてきた。現在の本宮・若宮は、徳川氏の造営になるものである。

境内は広く、三ノ鳥居からはいると、まず源平池があり、画面もここを映している。源平池は、北条政子の寄進、源氏平氏を記念するものである。この池に、橋がふたつ、太鼓橋と平らな新橋とがかかる。画面では左に太鼓橋、右に新橋が見える。

森田「㉛どちらの橋を渡りますか。」

佐藤「㉜わたしは、向こうの橋を渡ります。」

㉚の動詞「渡る」は、広さまたは幅のある或る場所の向こう側に至ることをめざして移動する意味、越えることになるその或る場所が格助詞「を」で示される。例えば、「川を渡る」「海を渡る」「空を渡る」など。㉛の「橋を渡る」は結果として「池を渡る」ことになり、このように向こう側に通じているもの上を移動するについても、「\_\_\_\_\_を渡る」を用いる。

㉜の指示詞「どちら」は、選択のときに用いる。「どちら」は「どれ」または「どこ」の丁寧な表現とされることがあるが、㉛の「どちら」は、「どれ」に置き換えて

㉝' どれの橋を渡りますか。

することが不自然であり、「の」を伴なった「どちらの」全体で「どの」に対応する。一般に、「これの」など「一の」の形は「この」など「一の」の形に置き換えることが必ずしもできず、「こちらの」など「一ちらの」の形は、「一の」「一の」双方の形に対応し得、後者にのみ対応する形をもたない。「一ちら」の形のこうしたあり方は、「ここ」など「一こ」の形のあり方に通ずるものであり、「一ちら」の意味が基本的には場所ないし方向に関わっているということかも知れない。なお、「一ちら」については、第八課『どちらが好きですか』を中心として扱っていて、『日本語教育映画解説8』を参照のこと。

㉔「向こうの橋」は、右の平らな新橋。「向こうの」は、「向こうに」に対する関係が「あちらの」の「あちらに」に対する関係に同じく、向こうにあるということ。「向こう（に）」については、⑭を参照。

観光絵地図で源平池および橋が示され、次いで、新橋を渡っていく佐藤が橋の横上方から、太鼓橋を渡ってくる吉川と森田とが正面から、それぞれ映し出される。

橋を渡ってさらに正面社殿方向に進むと、舞殿の前に至る。その向こうに若宮殿が見える。三人はこのあたりで鳩と遊んでいる。鳩の群れは、八幡宮の場面が始まったときにも、社殿を背景として飛びかかっていた。

画面は、石段の上に楼門の見える光景。楼門のむこうに本宮があるのであるが、画面にはついに現われない。石段を昇っていくときに左手に大公孫樹があり、すなわち、1219建保7年、源実朝を刺すべく甥公暁が隠れていて、その謀を遂げたという伝えのある公孫樹である。

石段の下に三人がいる。

吉川「㉕さあ、この段階を昇りましょう。」

佐藤「㉕いや、わたしは、下にいます。」

㉔の動詞「昇る」は、高い方へ向かって移る意味。低い方から高い方まで

の移動の場所の全体が、格助詞「を」によって示される。②に「\_\_\_\_\_に昇る」があり、移動の目標の場所としての高い方が、格助詞「に」によって示されている。

⑥の構文「\_\_\_\_\_にいる」については⑪を参照。

⑥の表現「さあ\_\_\_\_\_ましょう」については⑤を参照。

⑥の間投詞「いや」は、基本的には、同意しないことを示す。女性のことばとしては、ですます体には現われない。丁寧な言い方あるいは女性のことばとしては「いえ」「いいえ」があり、⑪に同じ佐藤のことばとして「いいえ」が現われている。⑥の相手は先輩吉川、⑪の相手は直接には一往恋人森田であるから、佐藤の用い方は逆ではないかとも思われる。しかしながら、「いや」には、自分の判断を自分で否認するときの用い方もある。

二月中にいや三月までかかります。

のようである。⑥についても、同様に、

⑥' (ええ、)いや、(やはり)私は下にいます。

のように、気持ちの上で一旦同意したものと考え直し、ことばとしてはその覆したところからのみ出た、ということであろう。「いいえ」にはこの用法がない。

吉川と森田とは石段を昇っていく。本宮に詣でるであろう。石段の下で、佐藤はふたりを待つのみである。その後、画面は一転し、三人が八幡宮を出ていくところである。

### 補 妙法寺

場面全体をカットした。三人が、鶴岡八幡宮を出、どこかの切り通しを経て妙法寺に至り、その境内で休んでから出ていくまでである。次のようなせりふが用意されていた。

佐藤 「少し休みませんか。」

吉川 「この先のお寺で休みます。」

森田 「さあ、でかけましょうか。」

佐藤 「もう少し休みましょう。」

吉川 「いや、そろそろでかけましょう。」

こここの第1 - 2文が、まだ妙法寺に至らない前のせりふである。ここで狙いとしていた点は、

動詞「休む」「でかける」の意味

構文「\_\_\_\_\_で休む」

「ましょう」「ましょうか」「ませんか」の用法

の理解である。しかし、ここによらなくとも、「ましょう」「ませんか」は⑤⑩に出てきてはいて、またその他間投詞「さあ」「いや」も⑤⑩に知ることができ。なお、妙法寺は、日蓮縁の寺の一、鎌倉の苔寺と言われるだけに美しく苔むしている。また、妙法寺の場面を前提とするときには、次の場面で三人が登る山は、妙法寺近辺の山と想定するのがよいかに思われる。ただし、山がなにであるにせよ、妙法寺を加えたコースは現実問題として無理であろう。

### Ⅷ 大臣山、タ

鶴岡八幡宮を出た三人は、八幡宮を南麓においていることになる大臣山へ登ろうとしている。

吉川「⑦ここから山に登ります。」

動詞「昇る」については、またその目標の場所を格助詞「に」が示していることについても、②を参照。そのような目標の場所としての名詞「山」の意味は、謂わゆる山でも、容易には行くことができない、頂上など相当に高いところまたは奥深いところ。指示詞「ここ」は、現在地の直接指示、山の登り口。と言ってはみても、⑦はそう明確であるわけではなく、

⑦' ここから（頂上に向かって、）山に登り（ていき）ます。

と解することも可能である。このときの名詞「山」は、謂わゆる山、頂上へと盛り上がっている地形の全体を、意味する。また、その「山」を、「登る」という移動の行なわれる場所の全体として、捉えるならば、「山に」の格助

詞「に」を「を」に置き換えることができる。更に、格助詞「から」は、「登る」という移動についてその始まりを示すということを一往無視するならば、「で」に置き換えることもできる。要するに、②は⑥に匹敵する意味の非一様性をもっていて、ただし、動詞の意味に左右されているよりは、むしろ名詞「山」の意味に左右されていると言い得る。

観光絵地図で、大臣山。ついで、勾配の大きい道を登っていく三人。吉川は森田の手を取るごとく、佐藤はその後をついていく風情。頂上では夕暮れを迎えることになる。街や海やが黃金色に照らされている。

佐藤「②陽が沈みますね。」

動詞「沈む」は、或る面の下に移る、またその或る面の下の場所に至る意味。一般に、その或る面またその下の場所は、格助詞「に」によって示される。ここでは、水平線の下すなわち海に移る。

構文「\_\_\_が\_\_\_ます」については⑬を参照。

画面は夕陽を一杯に捉え、その夕陽は黃白色の円に、その周囲が朱に染まっている。しかし、日本語の表現あるいは日本の理解の習慣としては、太陽は赤くなければならず、ヨーロッパにおけるような黃色系統であってはならない。それは文化の伝統である。

吉川「⑨もう直ぐ、お寺の鐘が聞こえますよ。」

動詞「聞こえる」は、耳に聴覚上のものとして感じられるという意味。⑬「見える」を参照。②は、「聞こえる」を置き換えて

⑨' もうすぐ、お寺の鐘の音がしますよ。

としても、同様の意味を保ち得る。この「音がする」の動詞「する」は、もとよりサ行変格活用動詞「する」にほかならないが、自動詞として用いられている点で特異であり、実質的な意味をほとんどもたずに、格助詞「が」と関わりながら構文を整えている。こうした「する」を用いた「\_\_\_がする」

の表現には、「\_\_\_\_\_」に立ち得るものとして、「音」のほかに

声　匂い　味　感じ　気持ち

などがあり、いずれも感覚に関わっている。

副詞「もう直ぐ」は、副詞ふたつに分解することができ、すなわち「もう」と「直ぐ」とである。「直ぐ」は、時間・距離をほとんどおかないという意味。一般に、「もう」は、時間・数量に関する副詞または名詞を修飾するときには、その時間・数量を加えてという意味。

もうしばらく　もう一日

もう少し　もう一杯

などがある。「いま」「あと」も「もう」と同様に用いられる。こうした語は、したがって、

(ながらくお待たせしますが)　もうしばらくお待ち下さい。

(一杯目がおいしかったから)　もう一杯飲みたい。

のように、これから行為がそれまでに既になされていたことを前提とする。しかしながら、副詞に表現された時間に関しては、❷に見られるごとく、そうした前提を必ずしも必要としない。そのときの副詞の時間は、「もう」に修飾されてもされなくても基本的には変わらず、ただ、「もう\_\_\_\_\_」と婉曲に表現された分だけ時間が多少長引いて感じられることになる。

「お寺」の「お」は敬謙の接頭辞。これを付することによって、そのものを粗末に扱っていないという気持ちを出している。同様の表現に、

お宮　お墓　お金　お米　お汁

などがある。

入り相いの鐘が響き渡る。寺で勤行を始める合図である。寺の鐘は響きを狙っていて、キリスト教会の鐘が最も狙っているであろう旋律をもたない。

吉川が先頭に立って、山を下りようとしている。

吉川「❸さあ、こちらから山を下ります。」

動詞「下りる」は、⑧では「乗る」の対であり、また「上がる」の対となる可能性もあるが、ここでは、「登る」の対。「山を下りる」で⑨の「山に登る」の対である。したがって、「山を下りる」には、⑨の意味の非一様性に並行する意味の非一様性がある。さらに、指示詞「こちら」の意味も、直接指示であることは明きらかながら、一点を指示しているのか、或る方面を指示しているのか、明瞭でない。いま、しかしながら、或る方面を指示し得る語を話し手吉川が初めて用いたということに、重きをおくなれば、すなわち或る方面を指示することになる。すると、格助詞「から」は、「下りる」という移動の出発点あるいは下り口を次つぎと移して示し、要するに経由する場所・方面を示すことになる。「山」は、それゆえ、全体としての山である。しかも、「を下りる」は、移動の場所全体をたどって次第に下りしていくことを意味するのか、すべての結果として⑧「タクシーを降りる」の「を降りる」のようなことを意味するのか、決定できないのである。

間投詞「さあ」は、⑤および⑨の「さあ\_\_ましょう」と、呼応のし方が異なっている。呼応すべき文末が「ます」である。しかしながら、「さあ」は⑤に述べたごとく用いられるしかない。一方、「ます」は、と言うより終止形そのままの形は、Louis Hjelmslev の謂わゆる外延項 (extense) として、完了・推量・意志・勧誘等の意味の加わった形を代理し得、この課でも多く予定の意味が加わっていた。ここでも、「ます」は意志・勧誘の意味を伴なっていると言うべく、しかもかえってその意味合いは強く出ているといい得るのである。

観光絵地図で大臣山から鎌倉への経路がたどられ、吉川の声がはいる。

吉川「⑩そして、鎌倉駅へ帰ります。」

⑪参照。

三人は細い道をたどって山を下りていく。

### 2.3. 語, 語法, 構文

この映画に使用される語は、基礎的なものばかりであり、さすがに動詞が多い。その動詞について、基本的な意味の関係をおさえておく便のため、いま国立国語研究所（林大）『国立国語研究所資料集6 分類語彙表』の分類に沿いつつ列挙するならば、

- 2.120 イル  
2.1521 ワタル  
2.1524 ト<sup>一</sup>オル  
2.1527 イク カ<sup>一</sup>エル モド<sup>一</sup>ル  
2.1530 デ<sup>一</sup>ル ハ<sup>一</sup>イル  
2.1540 ノボル  
2.1541 ノル オリ<sup>一</sup>ル  
シズム  
2.16 イソ<sup>一</sup>グ オクレル  
2.3090 ミエ<sup>一</sup>ル  
2.3092 キコエル  
2.3392 アル<sup>一</sup>ク

のごとくである。<sup>一</sup>は、アクセント核のある音節の直後あるいはアクセントの滝の位置を示す。「歩く」が他から離れているが、おそらく『分類語彙表』の側の問題でもある。名詞「歩き」は項目1.3392にとともに項目1.1513にもはいり、また、動詞「歩く」名詞「歩き」から直ちに連想されよう動詞「走る」は項目2.1523および2.3392にはいって、しかも名詞「走り」は項目1.3392にしかはいっていない。なお、動詞「歩む」名詞「歩み」も動詞「歩く」名詞「歩き」と同様に配されている。

その他現われる語は、品詞別にして、

- 形容詞 オソイ  
副 詞（指示） ソ<sup>一</sup>ウ  
(情態) イ<sup>一</sup>ツモ モウス<sup>一</sup>グ サイショニ

接続詞	ソシテ
連体詞（指示）	コノ アノ
名 詞（指示）	アレ ココ アソコ コチラ ド「チラ ムコ「ウ
	ワタシ
（抽象）	マ「エ ナ「カ ソ「ト シタ
（普通）	ヒト ヒ ヤマ「 シマ「 ウ「ミ カイガン エ「キ デンシャ タ「クシー <sup>ー</sup> ミチ ハシ「 カイダン モ「ン カネ テラ トライ ハチマ「ングウ
（固有）	サ「トウ カマクラ エノシマ
間投詞	イイエ「 イ「ヤ サ「ア オハヨウゴザイマ「ス
助動詞	デス マ「ス マセ「ン マショ「ウ (3.1.4 参照)
助 詞	ノ ガ ヲ ニ ヘ デ カラ マデ ハ カ ョ ネ
接 辞	オー ーサン

のようである。名詞「鎌倉」はタイトルにおけるものを除いて「鎌倉駅」の形のみ、名詞「寺」は「お寺」の形のみである。接頭辞「お」はその「お寺」の形で、接尾辞「さん」は「佐藤さん」の形で現われる。

動詞および形容詞は、必ず

動 詞（連用形） = 助動詞「ます」

形容詞（連体形） = 助動詞「です」

の形で現われ、助動詞は、この「ます」「です」のほか、この「ます」に「ません」「ましょう」の形で続くのみの「ない」「う」ばかりである。つまり

り、活用ということはこの課で問題とならない。アクセントも、したがって、動詞は第2拍以降の高い形のみが、形容詞は「オソイ」の形のみが現われるに過ぎない。

動詞とそれに係る格助詞とを一覧するならば、

A.        \_\_\_\_が沈む

(\_\_\_\_に) \_\_\_\_が見える

\_\_\_\_が聞こえる

B.        \_\_\_\_を通る

\_\_\_\_を渡る

\_\_\_\_を歩く    \_\_\_\_から\_\_\_\_まで歩く

\_\_\_\_から\_\_\_\_を降りる    \_\_\_\_で\_\_\_\_を降りる

\_\_\_\_を昇る    \_\_\_\_から\_\_\_\_に昇る

\_\_\_\_から\_\_\_\_に乗る    \_\_\_\_で\_\_\_\_に乗る

\_\_\_\_に出る

\_\_\_\_から\_\_\_\_にはいる

\_\_\_\_にいる

\_\_\_\_へ行く

\_\_\_\_へ帰る

\_\_\_\_へ戻る

のようである。ただし、格助詞と言いながら、一般に副助詞と扱われる「まで」をも掲げてある。A群においては、格助詞「が」が、主格・対格・与格という典型的な格のうちの主格の機能を担い、B群においては、A群の格助詞「に」とともに、格助詞などが、副詞に示されるような機能を担っている。同じい格助詞であっても、ヨーロッパの適当な言語であるならば、名詞の格変化における格に相当するか前置詞に相当するか、というくらいの違いがあるわけである。そうして、動詞の移動の意味に関わってきているのは、B群の方である。

ただし、A群のうちの「\_\_\_\_が見える」「\_\_\_\_が聞こえる」は、自発の助

動詞「れる～られる」を用いて、近似的に

\_\_\_が見られる      \_\_\_が聞かれる

と表わすことができる。この動詞「見る」「聞く」は、自発の助動詞を分離するならば、

\_\_\_を見る      \_\_\_を聞く

のように格助詞が変わる。要するに、「\_\_\_が見える」「\_\_\_が聞こえる」の格助詞「が」は、対格の意味合いをそなえていて、「\_\_\_が沈む」の格助詞「が」と些か趣きを異にする。

\_\_\_ができる、判る、得意だ、

\_\_\_が好きだ、嫌いだ、恋しい、

\_\_\_が欲しい、したい、

などと対比されてよいであろう。

#### 2.4. 音声と表記との関係について

映画の実際の音声は、シナリオの文字どおりの発音ではないし、文字に正確に記し得もしない。例えば、

①遅いですねー。

②遅いですね。

それぞれの終助詞「ね」の長さは、この仮字のように単純なものではない。間投詞「いいえ」「いや」「さあ」なども、やはり簡単には示すことができず、イントネイションは無視せざるを得ないのである。

### 3. この映画の効果的な利用のために

#### 3.1. 動詞について

言語における「語」の観念は、その言語が文字を得たときに、ようやくそれらしい存在を始めるものようであるが、そうした語のうちにあって、語る対象がなにであるかを示す一群の語と、その対象すなわち主題について云ふする一群の語とは、最も普遍的あるいは根本的であると言われる。この二群の語の後者にはいわゆる用言を引きあてることができ、その用言にあっては動詞が基本的であって、言語の言わば中枢をしめる動詞は、それなりの多様な性質をもっている。

ここでは、その多様な性質を知るための、動詞の分類の観点を、いくつか挙げてみることとする。分類については、オリジナリティをもつ先覚のものと同名異質・異名同質いづれもあり得るので、注意されたい。また、『日本語教育映画解説5』を全面的に参照のこと。

3.1.1. 意味における動詞 助動詞あるいは補助動詞との関係のし方で、意味の型が現われる。構文・形態による動詞分類も、実は意味による動詞分類であることがあるが、いまそのことについて特に検討することはしなかった。

**意志動詞・無意志動詞** 意志により得る動作等を意味するか、意志によらない動作等をもっぱら意味するか、で分かれる。助動詞「(よ)う」「まい」は、意志動詞についたときに

私が戻ろう。 私は戻るまい。

のように意志を表わし得、無意志動詞についたときに

雨が降ろう。 雨は降るまい。

のように推量のみを表わす。ただし、意志動詞と助動詞「(よ)う」「まい」との結合は、主語が非情であるときには、

繁栄が戻ろう。 繁栄は戻るまい。

のように、意志動詞が無意志的用法となって助動詞が推量を表わし、主語が自称を除く有情であるときには、

彼が戻ろう。 彼は戻るまい。

のように、助動詞が推量を表わし、主語が対称自称をともに含むときには、あなたと私とが戻ら（ずにいよ）う。

のように、助動詞「う」が勧誘を表わす。

一般に、意志動詞が無意志的に用いられるのは常のことであるが、無意志動詞が意志的に用いられるときには、修辞が行なわれている。

私は花と咲こう。

は、花が咲く「ように」華ばなしく生きようということである。

**継続動詞・瞬間動詞** 継続的な動作等を意味するか、瞬間的な動作等を意味するか、で分かれる。助詞「て」を介して補助動詞「いる」がついたとき、継続動詞は、

雨が降っている。

のように、動作の進行中であることを意味し、瞬間動詞は、

雨がやんでいる。

のように、動作の完了したことを意味する。

「ている」との結合については、継続・瞬間動詞のうちに含まれない動詞類が現われる。すなわち、継続・瞬間動詞が「ている」と自由に結合したりしなかったりするのに対し、原則として「ている」と結合してのみ現われる一類と、原則として「ている」と結合しない一類とが、なお存在する。

木がある。 往き来ができる。

のような動詞は、「ている」と結合せず、

山がそびえている。 空に似ている。

のような動詞は、「ている」と必ず結合している。「ている」と結合しないものはそれのみで、「ている」と必ず結合するものはその結合した形で、その状態にあることを意味している。

**敬讓動詞** 敬讓に関する意味をあわせもつものである。

先生がいらっしゃる。

のように主格を話者の上位に立てるもの、

私が先生にうかがう。

のように主格を斜格の下位に立てるもの、

奴がくたばる。

花に水をやる。

のように主格・斜格を絶対的に下位に立てるものがある。和語動詞連用形または漢語「する」複合動詞漢語部分に対して

なさる 遊ばす

下さる

致す

申し上げる 戴く

やがる

が補助的に用いられて敬謙の意味を添え、接続助詞「て」を介しながら動詞連用形に対して

いらっしゃる 下さる

上げる 戴く

やる

が補助的に用いられて敬謙の意味を添える。ただし、「やがる」は、一個の動詞として独立し得ないので、補助的と言うにも難がある。

### 3.1.2. 構文における動詞 構文の上でいろいろ制約を受けることがある。

**実質動詞・補助動詞** 実質的な意味を担って構文に与るか、実質的な意味をほとんどもたずに用言または体言を構文上で補助し得るかで、分かれる。補助動詞は、元もとは実質動詞であるものが転用されるようになったのであり、言い換えるならば補助動詞は常に実質的用法があり得る。日本語教育で「文型」として教授する事柄の多くのうちには、補助動詞が含まれている。補助動詞は各課で次つぎに学ぶことになるので、ここで述べることはしないが、補助的用法の一例を挙げておくなれば

行きはしたが、会いもしないで帰った。

行っていたが、帰ってきてしまった。

行ったり来たりする。

行きといい帰りといい、つらさを味わった。

静かにしろと言ったら、静かになった。

わが輩は猫である。

のようである。「する」複合動詞謂わゆるサ行変格複合動詞における「する」は、補助的用法であると考えてもよいが、いま少なくも名称についてのみは複合の名を残しておく。

**格支配** 実質動詞においては、要求する補足語の種類が決まっている。どのような補足語を要求するかということは、実はその動詞の意味を根拠とするものであると考えられるのであるが、それを構文上から捉えるならば、当該補足語に伴なって顯在ないし潜在する格助詞がなにであるかということで、置き換えることができる。その動詞の意味するところに対し、一般に主格の補足語は必ず存在し得、主格は格助詞「が」が示す。

治まる

のよう、原則として補足語に主格をしか要求しない動詞もあり、

敵と 戦う (抗格)

敵に 勝つ (与格)

敵を破る (対格)

敵と覇を争う (抗格・対格)

敵に覇を譲る (与格・対格)

のよう、他の格をも要求する動詞もある。なお、格の種類は、扱い方によっては、上の助詞の他の用法における格や、他の助詞による格やを、設定して加えなければならない。しかし、ここでは上のものを典型としておく。

**他動詞・自動詞** 補足語として対格を要求するか、しないかで分かれる。この概念は、日本独自の日本語学史にも本居宣長『詞の通路』などのものが見られるのであるが、現今においては、主としてヨーロッパの言語についての研究から出たものなのである。ヨーロッパの言語における他動詞自動詞は、対格要求の有無のみならず受動態形成の可否にも結びついていて、他動詞のみが受動態を形成し得、能動態における対格のみが受動態の主格に立ち得る。英語は、能動態における与格をも受動態の主格に立たせるようになっ

し、ヨーロッハリ言語の今や異端である。しかも、日本語は、能動態において対格はもとより与格をも受動態の主格に立たせて

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{覇が私から敵に譲られる。} \\ \text{敵が私から覇を譲られる。} \end{array} \right. < \text{私が敵に覇を譲る。}$$

のようであり、更には能動態において主格をしか要求しない動詞にも受動態の形成を許して

敵の内部に治まられて、攻め口を失った。

のようであって、ヨーロッパの言語と明きらかに異質である。日本語の自動詞の受動態は、受動態における主格の表わすものが結果として迷惑をこうむる、という意味をあわせもち、迷惑の受け身と呼び慣らわされている。ただし、迷惑の受け身という概念は、この名の表わし得る体を広く求めて革めて構文上で捉え直すならば、能動態において存在し得ない格を主格として立てた受動態というごとくにせらるべきかと考えられる。

敵が私に砦を落とされて、ついに退いた。

私が砦を落とした。

において、受動態は迷惑の意味をあわせもってしかも「落とす」が他動詞であり、受動態における主格「敵が」は、能動態においては、「敵の砦を」のように動詞に直接に関わらない形で存在し得るか、「敵から」のように典型的でない格の形で存在し得るかである。

能動詞・所動詞 受動態を形成し得るか、し得ないかで、分かれる。他動詞は能動詞である。自動詞は実は受動態を形成し得ないものもあり、例えば  
島がある。

島が見える。

音が聞こえる。

のようなものが受動態となることはあり得ず、このようなものが所動詞である。所動詞は自動詞である。

3.1.3. 形態における動詞 動詞の形態論は、大抵の言語の文典においてその中核を成すものである。ここでは簡略に述べておく。

**単純動詞・複合動詞** 一個の語であってその構成要素としても一語しか認め得ないか、一個の語でありながらその構成要素として二語以上を認め得るか、で分かれる。複合動詞においては、構成要素として末尾に位するものは動詞である。いま構成要素として二語を認め得る複合動詞について考えるならば、先行している方の構成要素は、

色づく 指さす 裏返す

におけるような名詞、

近寄る 高鳴る

におけるような形容詞語幹、

返り見(顧)る 出会う

におけるような動詞がある。こうした先行要素は末尾部分の動詞に対して構文関係に等しい関係を結び、例えは、上の「色」は主格、「指」は対格、「近」は連用修飾の機能を担い、

養い育てる 切り刻む

などにおいて類同の関係にある。

打ち揃う あい変わる

などにおいては、先行動詞は意味らしい意味をもたずに接頭辞化している。

複合動詞の末尾部分の動詞は、補助的用法における動詞と明瞭な一線を画しているわけではない。「する」複合動詞は、名称のとおりに複合動詞と考えても「する」を補助的用法と考えてもよい典型である。

片づける 近づける 聞きつける

買いこむ

泣き出す

などにおいても、末尾部分の動詞は補助的である。複合動詞の構成要素と認めるか補助的用法と認めるかは、生産性に関わるところが大きい。すなわち、特定語彙にのみついているならば複合動詞の構成要素であり、多くの語に原則として自由につき得るならば補助的用法である。そして、特定ということと自由ということとの境界が、定かに決め難い。

基幹動詞・派生動詞　単純動詞であってその語幹の構成要素としても一要素しか認め得ないか、単純動詞でありながらその語幹の構成要素として二要素以上を認め得るか、で分かれる。ただし、派生動詞の語幹の末尾部分は、一個の動詞の語幹であり得てはならない。例えば、

春めく 寒がる 書きあぐねる

はいずれも派生動詞であり、名詞・形容詞語幹・動詞連用形と動詞的部分との結合したものであるが、この動詞的部分「めく」「がる」「あぐねる」はいずれも一個の動詞として独立し得ない。このような派生動詞においては、動詞的部分としてなお

メモる 学者ぶる 気狂いじみる

力む 汗ばむ 華やぐ 見やがる

におけるようなものがある。このうちの「る」に準じて、

日和る ダブる 目論む 独り言つ

など、現代では生産性をあまりもたなくなつた、名詞の末尾音節を活用させる方法を、捉えることができるかも知れない。

基幹動詞・派生動詞の関係として、更に、動詞間におけるものがある。例えば、活用の項に言う語幹のみで示すこととして、

浮k 抜k 欠k 燃s 繫g

浮ke 抜ke 欠ke 燃e 繫ge 伸be 埋me 見se 寝 se  
伸bi 尽ki 見 寝

浮kas 抜kas 欠kas 燃jas 伸bas 尽kas

浮kab 抜kar 繫gar 尽kus 埋mar

浮kabe 埋more 見je 寝kase

のようなものである。これは動詞3個以上の間の関係の代表的なものであるが、2個のものの関係も大方はそのうちの一部である。派生関係において重要な関係は、自動詞他動詞の対立である。いま、そのうちの代表的なものを、動詞2個ずつを取り上げることによって整理してみる。この表で、上が自動詞、下が他動詞であり、非四段活用の終止形末尾「る」を省略、四段

「口巾の枕立ルルルル「る」「る」を取上行取「行」ソ第一品以て省略しハ。

残る刺さ 懸か

動く及ぶ 続く寄る

裂け流れ越え伸び伸び起き尽き明け見え

懸け続け寄せ 伸べ 見

刺す 裂く流す越す

残す 動か及ぼ 伸ば起こ尽く明か

**可能動詞** 可能の意味をあわせもつ動詞であり、かつ、形態上、四段活用動詞が語幹の末尾に母音 e を加えて派生した下一段活用動詞である。例えば「取れる」は可能動詞であるが、「取られる」「取り得る」は、助動詞・補助動詞の加わったものであるから、可能の意味をもっても可能動詞でない。可能動詞の元の四段活用動詞は、一般に、(1) 意志動詞である、(2) 瞬間動詞ないし継続動詞である、という条件を満たしている。「匂う」「降る」などが可能動詞の形をとらないのは、(1) が満たされないからである。ところで、現状では、可能動詞の形態上の根本的な条件である、四段活用動詞からの派生ということが、ゆるんできていて、非四段活用動詞にも「可能動詞」があり、「見れる」「来る」など特に頻用されている。

**活用** 一般に行なわれているものとは些か趣きを異にする活用表を、掲げてみることとする。

	一次語幹	未然	命令	二次語幹	連用	三次語幹	終止連体	仮定
四段	xcvc	a	e		i		u	e
一段	上 xi	ø	ø	ø	ø	u	ru	re
	下 xce							
非四段	二段 得る	e	ø	si	ø	u	ru	re
	三段 為る 来る	se ko		ki		su		

一次語幹において、Cは子音を、Vは母音を、XはCV連鎖を表わし、Xおよびその直後のCは空であってもよい。二次三次語幹における空欄は、一次語幹との異りがないということである。未然命令等は語尾である。二次語幹が一次語幹と異なる活用は、二次語幹が連用形語尾と結合して連用形を形成する。三次語幹が一次語幹と異なる活用は、三次語幹が終止連体形語尾また仮定形語尾と結合して終止連体形また仮定形を形成する。

なお、三段活用「為る」謂わゆるサ行変格活用動詞は、一次語幹を「si」として二次語幹を一次語幹と異ならないものとし、二段活用「得る」言い換えるならば下二段活用「得る」に並ぶところの上二段活用と扱うのが、適當であるとも思われる。「為る」の一次語幹が「se」でも「si」でもあり得るのは、

せず せよ せさせる せられる

しない しまい しろ しよう

におけるような姿を呈しているからである。複合動詞における「する」は、更に複雑であるが、基本的には、

- (1) { 「なくす」「愛す」 など四段活用  
「疎んじる」「感じる」 など上一段活用 への分離  
「決する」「使用する」 など三段活用

- (2) 「する～させる～される（～できる）」の交替の設定

という手段によって、整理・理解され得るように思われる。

四段活用と非四段活用とは、上の活用表から直ちに見て取ることができるようだ。

- (1) 語幹末尾の音が、四段は子音、非四段は母音である。

- (2) 語尾が、四段は一母音、非四段は零または一子音一母音の結合である。

という点で対立的である。のみならず、

- (3) 助動詞「(さ)せる」「(ら)れる」「(よ)う」が、四段には「さ」「ら」「よ」のない形で、非四段にはそのある形でつく。

- (4) 助動詞「まい」が、四段では終止形に、非四段では未然形につく。
- (5) 命令形が、四段ではそのままによく、非四段では更に「ろ」「い」または「よ」のつくことを必要とする。
- (6) 連用形が、助詞「て」助動詞「た」を伴なうとき、四段では語幹末尾「s」のものを除いて音便を起こし、非四段ではそのままである。といった、他の語との関わりにおける対立をも示している。四段活用未然形の語尾「o」の処理については、したがって助動詞「(よ)う」の処理についても、この解説書では立ち入らない。音便については直ぐ後で触れる。

**完全動詞・不完全動詞** 用法が幅広くて活用形すべてにわたって活用するか、用法が限られていて活用形ひとつ程度でのみ現われるか、で分かれる。例えば、「ござる」は、助動詞「ます」を伴なってしか現われず、言い換えるならば、「ござい」の形をしか見ることができない。瞬間動詞・継続動詞の項で触れた、原則として「ている」を伴なって用いる「似る」「そびえる」なども、同様である。「<sup>そぐ</sup>う」は「適わない」としか現われず、「済まない」「詰まらない」「行けない」などの動詞は、意味が元のものとかけ離れ、未然形によるこの「ない」の形あるいは連用形による「ません」の形でのみ現われる。なお、「ある」は助動詞「ない」を伴なうことがない。

以上のようなものに準じて捉え得るものに、いわゆる補充(suppletion)がある。「<sup>い</sup>居る」は、中止法においては、普通は「い」で現われずに「<sup>お</sup>居る」の連用形「おり」で現われる。この「居る」は、上に言う不完全動詞のごとく、その中止法「おり」か「おります」においてかの形が普通である。前の項の中で触れた、「する～させる～される～できる」も、補充である。

**3.1.4. 音韻における動詞** 動詞を音韻の観点から理解することが、どの程度まで成されているか、よく判らない。活用の或る部分は自律的な音韻現象とみなしえるものであるが、上に既に伏在させて述べてしまったところがある。ここでは、活用に関するものとしては、音便とアクセントとのみに触れるにとどめる。

**音便** 四段活用動詞は、サ行活用のものを除いて、助詞「て」また助動詞「た」を伴なったとき、音便を起こす。この音便を起こすことは、強制的である。音便とは、\_\_行活用動詞の活用の末尾音節が、五十音図の\_\_行の五音のいずれでもない音で現われる、という現象である。しかしながら、\_\_行がどのような音便を起こすかということは、カ行活用「行く」とワ行活用の一部とが特異な例を作るが、総体として一様に決定している。また、音便が起こったとき、助詞「て」や助動詞「た」やの初頭の音が濁音に転ずることがあり、これも、\_\_行活用の\_\_行から一様に決定する。すなわち

カ行	ガ行	イ
ワ行		ウ
タ行		ツ
ラ行		ン
パ行	マ行	起 こ す
	ナ行	音便の音
助詞「て」助動詞「た」など		
初頭が清音のままである	その初頭が濁音に転ずる	

のようである。ここに分類されて現われることになった各行の関係は、当然、日本語の子音体系がどのようなものであるかを、大方において示している。

助動詞「ない」や助詞「の」やを伴なうこととも、音便を起こす要因となる。ただし、この音便は強制的でなく、規範としてはかえって音便を起こさない。ラ行四段活用動詞は、助動詞「ない」の初頭音ナの活用形を伴なったとき、末尾音ラが音便ンであり得る。例えば、

取らない 判らない

取んない 判んない

のようである。ラ行四段活用動詞および非四段活用動詞は、助詞「の」を伴なったとき、末尾音ルが音便ンであり得る。例えば、

取るの 見るの 寝るの するの 来るの  
取んの 見んの 寝んの すんの 来んの

のようである。助詞「な」に関しても同様である。こうしたラ行音とナ行音との関わり合いも、日本語の音韻の見逃し得ぬ一面である。特殊な例となっているのは、固定表現として間投詞化した「済みません」で、「すいません」「すんません」の形をもっている。

**単母音化** 初頭がア行音またはワ行音である補助動詞の或るものが助詞「て」を介して実質動詞に伴なっているとき、補助動詞の初頭の母音と助詞「て」の母音とから成る重母音は、単母音化する。ただし、この単母音化は強制的でなく、規範としてはかえって重母音である。

て上げる て行く て居る て置く

たげる てく てる とく

のようであり、「てある」「ていただく」のように単母音化し難いものもある。こうした単母音化に準じて理解し得るものに

てしまう と言う

ちまう ちう(チュー)

があり、「てしまう」においては同時に母音の脱落と子音の合併とが起こり、「と言う」においては母音の脱落に拗音化・長母音化が加わって起こっている。

**アクセント** 動詞のアクセントは、助詞助動詞を伴なわずに動詞が現われているときには、基本的には

(1a)アクセント核(以下「ア核」)をもつかもたないか、動詞個個において決定している。

(1b)ア核をもつならば、1音節から構成される活用形として現われるときにはその音節に、2音節以上から構成される活用形として現われるときには末尾の直前の音節(paenultima)に、ア核をもつ。

例：キ「ル(切) キ「リ(切) キル(着) キ(着)

のようである。例外として、「はいる」「返る」が初頭音節にア核をもつなど、いくつかあることはある。問題は、助詞助動詞を伴なったときのアクセントである。動詞に伴なった助詞助動詞は、アクセントの観点からは、次の三

類に分けることができるが、助詞助動詞そのものはア核をもたない。表中の「」の意味は、後の(2)および(3)で明きらかになる。助詞助動詞を伴なう活用形を括弧内に示し、「終止」は終止連体形を指す。○はその活用形の末尾の音節(ultima)であるが、必ずしも挙げない。

- (I) (未然) ○(ヨ) ウ  
(運用) マス  
(終止) グライ ラシイ ダケ
- (II) (未然) (サ) セル (ラ) レル ○ナイ  
(運用) タイ ソウ ナガラ
- (III) (運用) ○副助詞 ニ テ (ハ) タ (リ)  
(終止) ○間投助詞 ○終助詞 ○接続助詞  
ネ ヨ マデ バカリ ソウ  
ダロウ デショウ ト クライ  
(仮定) ○バ

「\_\_\_\_\_助詞」と示したものは、例えば「○ハ」のように読み、別に現われているものを含まない。このような助詞助動詞を伴なったとき、動詞は、ア核をつぎの規則(2)(3)に支配される。

(2a)ア核をもつ動詞は、第IおよびII類助詞助動詞によって、ア核を移させられる。その位置は、助詞助動詞に示された「」の直前の音節である。

例：キロウ キリマス キラセル キリタイ(切)

(2b)ア核をもたない動詞は、第IおよびIII類助詞助動詞によって、ア核を与えられる。その位置は、助詞助動詞に示された「」の直前の音節である。

例：キヨウ キマス キハ キルマデ(着)

ア核の示されていない助詞助動詞を伴なったときには、(2)の拡張として、ア核が失われるものと解することとする。

(3) (2)に言及されない場合は、ア核の有無・位置は、(1)を保持

する。

例： キ「リハ キ「ルマヂ（切） キサセル キタイ（着）

助詞助動詞が重なった場合については省略に隨うが、原則としては、その最後のものに示された「の直前の音節にア核が位置することになるものと、考えてよい。上記（Ⅲ）（連用）の「テ「ハ」および2. 3. を参照。

構成音 \_\_\_\_行\_\_\_\_段活用と言うときの、その\_\_\_\_行と\_\_\_\_段との関係は、つぎのようである。「\_\_\_\_行」については「\_\_\_\_」のみ記す。

四 段	ワ	カ	ガ	サ	タ	ナ	バ	マ	ラ			
上一段	ア	カ	ガ		ザ	タ	ナ	ハ	バ	マ	ラ	
下一段	ア	カ	ガ	サ	ザ	タ	ダ	ナ	ハ	バ	マ	ラ
下二段	ア											
三 段		カ		サ								

この表は、基本的には、3. 1. 3. の活用の項に言う語幹について、そのうちでの末尾子音ないし末尾音節の子音のあり方を、示すものである。ただし、そのあり方として実質的に意味するところは、四段活用の語幹の末尾子音に、ザ行子音およびダ行子音は現われない、というところに留まる。ハ行四段活用が欠如することは、日本語の一般的な音韻構造上、当然である。また、上一段活用にダ行活用が欠如することも、「ヂ」が「ジ」に併合されている以上、当然である。そうして、サ行上一段活用の存在の可能性については、3. 1. 3. の活用の項で指摘した、「する」複合動詞における上一段活用「\_\_\_\_じる」の存在から、あるいは予測し得るかも知れない。

動詞の語幹を構成する母音のうち、非四段活用における末尾のものは、原則としてiまたはe、唯一の例外が「来る」のoであり、ただし、下二段活用「得る」、サ行変格活用「為る」、カ行変格活用「来る」のものは、iまたはuに交替する。以上のものを除くならば、四段活用においても非四段活用においても、語幹を構成する母音は、後舌母音a, o, uが多い。いま、未然形が2音節から構成されている動詞について、その第1音節の母音を調べてみると、

四 段	i	15	e	10	a	50	o	45	u	50
上一段	i	5	e	0	a	10	o	10	u	5
下一段	i	25	e	5	a	45	o	35	u	40
合計		45		15		105		90		95

のようである。ただし、一語という認定に問題があって、ここの数字は5単位で少なめに見積もってあり、例えば上一段活用の「e 0」も実は「ねびる」がある。大方を知る参考とはなるであろう。音節数を増していっても、傾向はさして変わりもしないようである。

### 3.2. 格助詞について

この課に現われた格助詞で、副詞に示されるような機能を担うと2.3.で言ったものにつき、典型的な格の機能にも触れつつ、述べておく。ただし、「が」については、2.3.で触れた以上に言うべきこともいま特になく、省略に随う。また、「の」についても省略する。

を 典型的な格の機能を担うものとしては、対格に関わる。また、自動詞が使役の意味を加えられて他動詞に準ずるようになったとき、

私は国を治まらせる。

国が治まる。

におけるように、自動詞にとっての潜在的な主格は「を」に担われる。この「\_\_\_を」を対格に準じて考えてよいことは、当該の自動詞に対応する純然たる他動詞を用いたとき、

私は国を治める。

におけるように、純然たる対格が並行して現われてくることで、明きらかである。更に、自動詞がそのままの形で他動詞のごとく

授業を終わる。

のように用いられることがあり、すなわち「\_\_\_を」が現われている。

移動を意味する自動詞に対して、その移動の行なわれる場所の全体ないし一点を示すのに「を」を用いる。この課では、2.3.の構文一覧のB群における

る「\_\_\_\_を<動詞>」の「を」として出ていて、再び動詞の側を挙げておくならば

通る 渡る 歩く 昇る 降りる

である。この「\_\_\_\_を」は、対格とまぎれやすくて動詞の自動性他動性の認定にも影響をおよぼすのであるが、自然な形で受動態の主格に立つことがあり得ず、その点で対格と異なる。なお、この用法は、空間性を時間性にも拡張して、すなわち継続的移行を意味する動詞に対してその継続的移行の行なわれている空間・期間を示すというように捉え直すならば、

80年間（の長い生涯）をたくましく生き抜いた。

のような用法にも通じていく。

に 典型的な格の機能を担うものとしては、与格に関わる。また、動詞が使役の意味を加えられまたは受動態を形成させられるとき、

私は 彼に敵を破らせる。

敵は彼に 破られる。

彼が敵を破る。

におけるように、動詞にとっての潜在的な主格は「に」に担われる。この「\_\_\_\_に」が与格に準ずるかも知れないことは、当該の他動詞に対応する自動詞を用いたとき、

敵は彼に 破れる。

におけるように、与格が並行して現われてくることに覗われる所以であるが、実は、いま与格としているもののうちで対格と共存し得ないすなわち自動詞に関わるものと、なお与格としておいてよいか、はなはだ問題があり、ただし立ち入らない。

副詞の示すような機能を担うものとしての「に」では、いくつかの用法のうちに場所を示す用法がある。その場所の示し方は、関わる動詞によって異なる。第一に、存在を意味する動詞との関わりにおいては、存在の場所を示し、この課では「\_\_\_\_にいる」が現われている。知覚を意味する動詞との関わりにおけるものもこれに準じて、知覚の対象の存在の場所を示し、この課

では「\_\_\_\_\_に見える」が現われている。第二に、移動を意味する動詞との関わりにおいては、移動の目標となる場所を示し、この課では「\_\_\_\_\_に登る」「\_\_\_\_\_に出る」「\_\_\_\_\_にはいる」が現われている。第三に、「\_\_\_\_\_に乗る」が現われ、2.2.2. I に指摘したとおり、動詞「乗る」の意味するところが瞬間的であるか継続的であるかに問題を残し、それによって上の第二の類の場所が示されることになるか第一の類の場所が示されることになるかの違いが出るが、いずれにせよ「\_\_\_\_\_」が乗り物であることは変わりがない。第二の類の場所を示す「に」は、一般に「へ」に置き換えることができ、そのとき「に」を用いるか「へ」を用いるかでどのような違いが出るのか、例えば「へ」を用いる方が方向意識が強く示されるといったようなことがあるかも知れないが、定かでない。

へ 副詞的機能を担って、移動を意味する動詞と関わり、そのときの場所の示し方に「に」との違いは定かでない。この課では「\_\_\_\_\_へ行く」「\_\_\_\_\_へ帰る」「\_\_\_\_\_へ戻る」が現われる。なお、与格の機能を担うこともあり、ここでも「に」と重なるが、場所を示すにせよ与格を示すにせよ、「\_\_\_\_\_へ」「\_\_\_\_\_に」が名詞化して連体助詞あるいは格助詞「の」の前に立つときには、

敵に 覆を譲る。 前に 出る。

敵へ 覆を譲る。 前へ 出る。

敵への覆の譲渡。 前への進出。

におけるように中和して「\_\_\_\_\_へ」しか存在し得ない。

から 副詞的機能を担うものとしては、一用法として、動詞の意味するところが始まる場所またその累加としての経路を示す。この課では、2.3. の構文一覧のB群中欄における「\_\_\_\_\_から<動詞>」の「から」として出ていて、再び動詞の側を挙げておくならば

歩く 出る 降りる 乗る 昇る

である。示す場所が具体的にどのようなものになるかは、動詞の意味的性質によって異なり、2.2.2. I・III以下に言ったとおりである。なお、くだんの

用法は、

朝から晩まで歩き通した。

におけるように、時間を示すことへも拡張し得る。始まりの場所・時間に対し、終わりの場所・時間は、副助詞「まで」によって示され、あるいは格助詞「に」「へ」の示す目標に代理される。

で 副詞的機能を担うものとしては、一用法として、作用・動作・移動・変化を意味する動詞と関わり、その作用等の全体が行なわれる場所を示す。この課では、「\_\_\_で（\_\_\_を）降りる」「\_\_\_で（\_\_\_に）乗る」が出ている。他に格助詞が共起していて、その格助詞が副詞的機能を担ってなにらかの場所を示しているならば、その場所を、格助詞「で」の示す場所は含んでいかなければならない。

まで この課では「\_\_\_から\_\_\_まで歩く」という形の中で出ていて、格助詞「から」が出発点を示すことと関連して到着点を示している。この「\_\_\_から\_\_\_まで」の相關が「まで」の用法として重要なひとつであるので、この用法における「まで」を格助詞とみなす考え方がある。一般に行なわれている副助詞とする考え方は、「まで」の性格全般を見渡しているからであるという。いまひとつ重要な用法である、「さえ」と同意であるものは、ともかくとして、しかし、到着点を示す用法における「まで」は、格助詞「から」と対比してみて、格助詞と認めてよいのではないかと思われる。格助詞「から」には同形の接続助詞があり、同様に、格助詞「まで」に同形の副助詞があることになってもよいであろう。いまは、以上些か抽象的であることを、見通しとして述べるに留めておくこととする。

#### 4. 参照文献

この解説書の執筆に当たって参考したものから、動詞に関わるものを中心として採った。雑誌論文は挙げなかつたので、関係書とともに、下記各書の参照文献の項によられたい。

- 金田一春彦 1959 「動詞」（明治書院1959 pp. 175—202）  
阪倉篤義 1974 『改稿日本文法の話』 教育出版  
佐久間鼎 1936 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣  
—— 1940 『現代日本語の研究』 厚生閣  
鈴木一彦 - 林巨樹 1972 『品詞別日本文法講座3 動詞』 明治書院  
鈴木重幸 1972 『日本文法・形態論』 麦書房  
鈴木丹士郎 1972 「動詞の問題点」（鈴木 - 林1972 pp. 133—180）  
時枝誠記 1950 『日本文法口語篇』 岩波書店  
橋本進吉 1948 『国語法研究』 岩波書店  
林 大 1964 『分類語彙表』 秀英出版  
松下大三郎 1928 『改撰標準日本文法』 勉誠社, 1974年  
—— 1930 『標準日本口語法』 勉誠社, 1977年  
三上 章 1953 『現代語法序説』 くろしお出版, 1972年  
—— 1955 『現代語法新説』 くろしお出版, 1972年  
宮島達夫 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版  
明治書院 1958 『日本文法講座6 日本文法辞典』 明治書院  
—— 1959 『続日本文法講座1 文法各論編』 明治書院  
山田孝雄 1936 『日本文法学概論』 宝文館  
—— 1922 『日本文法講義』 宝文館  
—— 1922 『日本口語法講義』 宝文館  
湯沢幸吉郎 1953 『口語法精説』 明治書院, 1977年

# 資 料

## 資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2. のシナリオ全文同様、そのまま教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
  - 2—1. 接頭辞「お」を伴う語例は「おてら」一例であるが、ここでは「お」は別語扱いにした。
  - 2—2. 動詞は「ます」を取り除いた形、つまり連用形を見出し語にし、その横に終止形を示した。
  - 2—3. 「ません」等、「ます」の変化形は、それぞれ見出し語にしている。
  - 2—4. 「ございます」を見出し語にしている。
  - 2—5. 「さいしょに」「もうすぐ」等は、副詞として一語扱いにして見出し語にしている。
  - 2—6. 「おはよう」等慣用的表現として扱ったものは、そのまま見出し語にしている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等により下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
  - 3—1. 「が」は、意味的に主語を表すものと「\_\_\_がみえる／きこえる」となるもので下位分類した。
  - 3—2. 「に」は、それぞれ存在場所、帰着点を言う場合で下位分類してある。
  - 3—3. 「を」は、それぞれ経過場所、出発点を言う場合で下位分類してある。
  - 3—4. 「か」は、質問的に言う場合と勧誘的に言う「ませんか」の場合

で下位分類した。

- 3—5. 「です」「ます」については、その後に伴う終助詞の種類、またその機能により下位分類してある。
4. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については、通し番号を横に並べ引用を一回ですませた。
5. 見出し語の横には、〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には( )で語の使用回数を示した。

あそこ (1)

⑥ あそこから、タクシーにのります。

あの (3)

③ あのひとは、いつもおくれます。

⑧ あのものまで、タクシーをおります。

㉔ あのとりいのしたをとおります。

あるき、あるく〔歩く〕 (2)

⑫ ここから、かいがんまであるきます。

⑯ このみちをあるきます。

あれ (2)

⑮ あれは、えのしまです。

㉐ あれがはちまんぐうですね。

い、いる (2)

⑪ いいえ、そこにいます。

㉖ いや、わたしは、したにいます。

いいえ (1)

⑪ いいえ、そこにいます。

いき、いく〔行く〕 (1)

⑦ さいしょに、ここへいきます。

いそぎ、いそぐ〔急ぐ〕 (1)

⑤ さあ、いそぎましょう。

いつも (1)

③ あのひとは、いつもおくれます。

いや (1)

㉖ いや、わたしは、したにいます。

うみ (1)

⑯ うみがみえますよ。

えき (3)

- ⑯ このえきで、でんしゃにのります。
- ⑰ そして、かまくらえきへもどります。
- ⑯ そして、かまくらえきへかえります。

えのしま〔江の島〕（1）

- ⑯ あれは、えのしまです。

お（1）

- ㉙ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

おくれ、おくれる〔遅れる〕（1）

- ③ あのひとは、いつもおくれます。

おそい〔遅い〕（2）

- ① おそいですねー。
- ② おそいですね。

おはよう（1）

- ④ おはようございます。

おり、おりる〔降りる、下りる〕（2）

- ⑧ あのものまえで、タクシーをあります。
- ㉚ さあ、こちらからやまとります。

か（2）

- (1)㉚ どちらのはしをわたりますか。
- (2)⑩ さとうさん、はいりませんか。

が（5）

- (1)㉚ あれがはちまんぐうですね。
- ㉚ ひがしづみますね。
- (2)㉚ うみがみえますよ。
- ⑭ むこうにしまがみえますね。
- ㉙ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

かいがん〔海岸〕（1）

- ㉚ ここから、かいがんまであるきます。

かいだん〔階段〕 (1)

㊯ さあ、このかいだんをのぼりましょう。

かえり、かえる〔帰る〕 (1)

㊱ そして、かまくらえきへかえります。

かね〔鐘〕 (1)

㊲ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

かまくら〔鎌倉〕 (2)

㊳ そして、かまくらえきへもどります。

㊴ そして、かまくらえきへかえります。

から (5)

⑥ あそこから、タクシーにのります。

⑨ ここから、なかにはいります。

⑫ ここから、かいがんまであるきます。

⑯ ここから、やまにのぼります。

⑰ さあ、ここから、やまをくだります。

きこえ、きこえる〔聞える〕 (1)

㊲ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

ここ (4)

⑦ さいしょに、ここへいきます。

⑨ ここから、なかにはいります。

⑫ ここから、かいがんまであるきます。

⑯ ここから、やまにのぼります。

ございます (1)

④ おはようございます。

こちら (1)

㊱ さあ、こちらから、やまをります。

この (3)

⑯ このえきで、でんしゃにのります。

⑯ このみちをあるきます。

㉔ さあ、このかいだんをのぼりましょう。

さあ (3)

⑤ さあ、いそぎましょう。

㉔ さあ、このかいだんをのぼりましょう。

㉓ さあ、こちらから、やまをおります。

さいしょに (1)

⑦ さいしょに、ここへいきます。

さとう [佐藤] (1)

⑩ さとうさん、はいりませんか。

さん (1)

⑩ さとうさん、はいりませんか。

しづみ、しづむ [沈む] (1)

㉔ ひがしづみますね。

した [下] (2)

㉔ あのとりいのしたをとおります。

㉔ いや、わたしは、したにいます。

しま [島] (1)

⑭ むこうにしまがみえますね。

そう (1)

㉔ そうです。 (1)

そして (3)

㉗ そして、かまくらえきへもどります。

㉙ そして、はちまんぐうのまえにでます。

㉛ そして、かまくらえきへかえります。

そと (1)

⑪ いいえ、そとにいます。

タクシー (2)

⑥ あそこから、タクシーにのります。

⑧ あのものまえで、タクシーをおります。

で (2)

⑧ あのものまえで、タクシーをおります。

⑯ このえきで、でんしゃにのります。

で、でる〔出る〕 (1)

⑯ そして、はちまんぐうのまえにでます。

です (5)

(1)⑯ あれは、えのしまです。

⑯ そうです。

(2)① おそいですねー。

② おそいですね。

⑯ あれがはちまんぐうですね。

てら〔寺〕 (1)

⑯ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

でんしゃ〔電車〕 (1)

⑯ このえきで、でんしゃにのります。

とおり、とおる〔通る〕 (1)

⑯ あのとりいのしたをとおります。

どちら (1)

⑯ どちらのはしをわたりますか。

とりい〔鳥居〕 (1)

⑯ あのとりいのしたをとおります。

なか〔中〕 (1)

⑨ ここから、なかにはいります。

に (8)

(1)⑪ いいえ、そとにいます。

⑯ むこうにしまがみえますね。

- ㉙ いや、わたしはしたにいます。  
(2)⑥ あそこから、タクシーにのります。  
⑨ ここから、なかにはいります。  
⑯ このえきで、でんしゃにのります。  
㉗ ここから、やまにのぼります。  
(3)⑯ そして、はちまんぐうのまえにでます。

#### ね (5)

- ① おそいですねー。  
② おそいですね。  
⑯ むこうにしまがみえますね。  
㉙ あれがはちまんぐうですね。  
㉙ ひがしづみますね。

#### の (6)

- ⑧ あのものまえで、タクシーをおります。  
⑯ そして、はちまんぐうのまえにでます。  
㉙ あのとりいのしたをとおります。  
㉙ どちらのはしをわたりますか。  
㉙ わたしは、むこうのはしをわたります。  
㉙ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

#### のぼり、のぼる [登る] (2)

- ㉙ さあ、このかいだんをのぼりましょう。  
㉗ ここから、やまにのぼります。

#### のり、のる [乗る] (2)

- ⑥ あそこから、タクシーにのります。  
⑯ このえきで、でんしゃにのります。

#### は (4)

- ③ あのひとは、いつもおくれます。  
⑯ あれは、えのしまです。

㉔ わたしは、むこうのはしをわたります。

㉕ いや、わたしは、したにいます。

はいり、はいる〔入る〕（2）

㉗ ここから、なかにはいります。

㉘ さとうさん、はいりませんか。

はし〔橋〕（2）

㉙ どちらのはしをわたりますか。

㉚ わたしは、むこうのはしをわたります。

はちまんぐう〔八幡宮〕（2）

㉛ そして、はちまんぐうのまえにでます。

㉜ あれがははちまんぐうですね。

ひ〔日〕（1）

㉝ ひがしづみますね。

ひと〔人〕（1）

㉞ あのひとは、いつもおくれます。

へ（3）

㉟ さいしょに、ここへいきます。

㉛ そして、かまくらえきへもどります。

㉜ そして、かまくらえきへかえります。

まえ（2）

㉟ あのものまえで、タクシーをおります。

㉛ そして、はちまんぐうのまえにでます。

ましよう（2）

㉞ さあ、いそぎましよう。

㉜ さあ、このかいだんをのぼりましよう。

ます（22）

(1)(3) あのひとは、いつもおくれます。

㉟ あそこから、タクシーにのります。

- ⑦ さいしょに、ここへいきます。
- ⑧ あのものまえで、タクシーをおります。
- ⑨ ここから、なかにはいります。
- ⑩ いいえ、そとにいます。
- ⑪ ここから、かいがんまであるきます。
- ⑫ このえきで、でんしゃにのります。
- ⑬ そして、かまくらえきへもどります。
- ⑭ このみちをあるきます。
- ⑮ そして、はちまんぐうのまえにでます。
- ⑯ あのとりいのしたをとおります。
- ⑰ わたしは、むこうのはしをわたります。
- ⑱ いや、わたしは、したにいます。
- ⑲ ここから、やまにのぼります。
- ⑳ さあ、こちらから、やまをおります。
- ㉑ そして、かまくらえきへかえります。
- (2)㉒ どちらのはしをわたりますか。
- (3)㉓ むこうにしまがみえますね。
- ㉔ ひがしづみますね。
- (4)㉕ うみがみえますよ。
- ㉖ もうすぐ、おでらのかねがきこえますよ。

ません (1)

⑩ さとうさん、はいりませんか。

まで (1)

㉑ ここから、かいがんまであるきます。

みえ、みえる〔見える〕 (2)

㉒ うみがみえますよ。

㉓ むこうにしまがみえますね。

みち〔道〕（1）

⑯ このみちをあるきます。

むこう〔向こう〕（2）

⑭ むこうにしまがみえますね。

㉔ わたしは、むこうのはしをわたります。

もうすぐ（1）

㉙ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

もどり、もどる（1）

⑯ そして、かまくらえきへもどります。

もん〔門〕（1）

⑧ あのもんのまえで、タクシーをおります。

やま〔山〕（2）

㉗ ここから、やまにのぼります。

㉙ さあ、こちらから、やまをおります。

よ（2）

⑯ うみがみえますよ。

㉙ もうすぐ、おてらのかねがきこえますよ。

わたし〔私〕（2）

㉔ わたしは、むこうのはしをわたります。

㉖ いや、わたしは、したにいます。

わたり、わたる〔渡る〕（2）

㉙ どちらのはしをわたりますか。

㉙ わたしは、むこうのはしをわたります。

を（7）

(1)⑯ このみちをあるきます。

㉙ あのとりいのしたをとおります。

㉙ どちらのはしをわたりますか。

㉙ わたしは、むこうのはしをわたります。

㉙ さあ、このかいだんをのぼりましょう。

㉚ さあ、こちらから、やまとります。

(2)⑧ あのもんのまえで、タクシーをおります。

## 資料2. シナリオ全文

題名　日本語教育映画  
「かまくらを　あるきます」  
——移動の表現——

企画　国立国語研究所  
制作　日本シネセル株式会社  
フィルム　16% EKカラー・スタンダード  
巻数　全1巻  
上映時間　5分  
現像所　東映化学  
録音　アオイスタジオ  
完成　昭和52年3月8日

制作スタッフ

制作	静永純一
制作担当	神崎晴之
脚本	前田直明
演出	前田直明
演出助手	今村秀夫
撮影	相良国康
撮影助手	佐々木宏
照明	伴野功
音楽	吉田征雄
録音	掘内戦治(アオイ ST)
ネガ編集	亀井正
配役	吉川　武田国久(声) 森田　白坂道子(声) 佐藤　斎藤隆(声)

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 日本語教育映画	
2	サブ・タイトル かまくらを あるきます —移動の表現—	
3	鎌倉駅前（朝）	
4	出勤や観光客でにぎわう駅前 人待ち顔の吉川（男）と森田 (女) が立っている	吉川「①おそいですねー。」 森田「②おそいですね。 ③あのひとは、いつも おくれます。」
5	駅の出札口 人々の流れが激しい	
6	駅の大時計が分を刻む	
7	吉川、森田いらついてくる	
8	ひっきりなしにバスが出て行く	
9	いらっしゃる二人の顔	
10	たばこをふかしながら、ゆっ くり現れる佐藤（男）	佐藤「④おはよう ございま す。」 吉川「⑤さあ、いそぎましょ う。 ⑥あそこから、タクシ ーにのります。」
11	(カメラ、タクシー乗場に移 動)	
12	タクシーに乗り込む三人	
13	鎌倉の観光地図の上を指がた どり、大仏を指す	吉川「⑦さいしょに、ここへ いきます。」
14	街並が走り、大仏の門が見え てくる	吉川「⑧あのもんのまえで、 タクシーをおります。」
15	高徳院門前でタクシーを降り る三人	

16	鎌倉の大仏 大仏を正面に見て、向かって歩いていく三人	
17	大仏の横顔から（カメラ）振り下ろすと、小さい入口が見える	
18	大仏胎内入口前の三人 吉川、森田、中に入していく	吉川「⑨ここから、なかには いります。」 森田「⑩さとうさん、はいり ませんか。」 佐藤「⑪いいえ、そとにいま す。」
19	大仏胎内の階段の上から外が 見える 外では佐藤が待っている	
20	大仏から出てくる吉川と森田 三人、大仏を後にする	
21	高徳院内	
22	観光絵地図	吉川「⑫ここから、かいがん まであるきます。」
23	鎌倉海岸 三人、道路を歩いている	
24	海が見えてくる	佐藤「⑬うみがみえますよ。」
25	水平線から右に目を移すと、 江の島が見えてくる	森田「⑭むこうにしまがみえ ますね。」 吉川「⑮あれは、えのしまで す。」
26	浜辺で遊ぶ三人	
27	海面のきらめき	
28	打ち寄せる波	
29	波にたわむれる三人	
30	江の電、稻村ガ崎駅改札を抜け、ホームへ向かう三人	吉川「⑯このえきで、でんし やにのります。」
31	観光絵地図（駅）	

32	電車が来て、三人乗る 走る線路	吉川「⑯そして、かまくらえ きへもどります。」
33		
34	観光絵地図（線路から鎌倉駅 へ）	
35	鎌倉駅前の横断歩道を三人が 歩いてくる	
36	観光絵地図（八幡宮桜並木通 り）	吉川「⑯このみちをあるきま す。」
37	桜並木通り	
38	歩く三人（その足元）	吉川「⑯そして、はちまんぐ うのまえにでます。」
39	観光絵地図（八幡宮鳥居）	
40	鳥居の奥に八幡宮本殿が見え てくる	森田「⑯あれがはちまんぐう ですね。」 吉川「⑯そうです。 ⑯あのとりいのしたを とおります。」
41	鳥居の下を通る三人	
42	二つの橋 たいこ橋、その右側には平ら な橋がかかっている	森田「⑯どちらのはしをわた りますか。」 佐藤「⑯わたしは、むこうの はしをわたります。」
43	観光絵地図（たいこ橋）	
44	二つの橋の前の三人	
45	平らな橋	
46	平らな橋を渡る佐藤	
47	たいこ橋を渡ってくる吉川と 森田	
48	八幡宮境内 舞殿を前座に本殿がひかえて いる	
49	境内の鳩と遊ぶ三人	
50	本殿に通じる階段下	

- |    |   |   |
|----|---|---|
| 51 | 三人が歩いてくる<br>広く長い階段<br>階段下の三人<br>吉川、階段を指さして――          | 吉川「㉙さあ、このかいだん<br>をのぼりましょう。」<br>佐藤「㉚いや、わたしは、し<br>たにいます。」 |
| 53 | 吉川、森田の二人は階段を登<br>って行く                                 |   |
| 54 | 階段下で二人の帰りを待って<br>いる佐藤                                 |   |
| 55 | 八幡宮を出ていく三人<br>山<br>山の登り口に向かって歩いて<br>いく三人の後姿           | 吉川「㉛ここから、やまにの<br>ぼります。」                                 |
| 56 | 観光絵地図（八幡宮裏山 P A<br>N）                                 |   |
| 57 | 急勾配の坂道を登って行く吉<br>川と森田<br>後から佐藤がゆっくりついて<br>行く          |   |
| 58 | 頂上<br>夕暮が近づいている<br>街や海が黃金色にてらし出さ<br>れて見える             | 佐藤「㉜ひがしづみますね。」  |
| 59 | 真っ赤な太陽が水平線のかな<br>たにおごそかに身を沈めてい<br>く<br>(寺の鐘が一帯にひびき渡る) | 吉川「㉝もうすぐ、おてらの<br>かねがきこえますよ。」                            |
| 60 | 細い山道を下りようとしてい<br>る三人                                  | 吉川「㉞さあ、こちらから、<br>やまをおります。」                              |
| 61 | 観光絵地図<br>(山から鎌倉駅へ)                                    | 吉川「㉟そして、かまくらえ<br>きへかえります。」                              |

62	山を下りて行く三人
63	企画・制作タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社

昭和55年3月

国 立 国 語 研 究 所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14  
電話東京(900)3111(代表)

印刷所(株)文京印刷  
電話(813)5836